

一九三〇年代、鉄道教習所中国人留學生の研究

宗村 高満

はじめに

清朝末期の一八九六年から、一九二二年の辛亥革命と中華民国成立を経て日中戦争開戦の一九三七年まで、岩倉鉄道学校といった文部省所管の鉄道学校に加え、東京にあった鉄道教習所^①にも、多数の中国人留學生が学んでいる。しかし先行研究は、留學生の第一人者実藤恵秀氏の『中国人 日本留学史』(くろしお出版、一九六〇年)と阿部洋氏の『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、一九九〇年)で清朝末期の留學生の動向の一環として在籍していたことが言及される程度で、中華民国期は、筆者の管見の限り見出せなかった。また、日中ともに鉄道史からの人材育成についての言及は、筆者の管見の限りでは、わずかに三上敦史氏の「鉄道教習所の教育史」(吉田文・広田照幸編『職業と選抜の歴史社会学』、世織書房、二〇〇四年)を数えるのみである。中国鉄道史は利権と南満州鉄道関係、日本鉄道史は学術的なものでは、政敵であった後藤新平と原敬が鉄道院総裁とそれを所管する通信大臣になったときの関係を論ずるものか、先に狭軌で主要幹線を構築し、そのあと標準軌にするか、はじめから標準軌で建設するかの標準軌改軌問題。経済学の予備知識がないと理解できない私鉄の経営史、技術・建築の予備知識がないと理解できない近代化遺産としての駅舎、鉄橋、トンネルなどの各種鉄道構築物と鉄道車両の技術を論ずるもの。「マニアの歴史」は特定の車両の車歴と形式分類。時刻表の変遷、青函連絡船洞爺丸海難、宇高連絡船紫雲丸海難、桜木町電車火災、三河島事故、三鷹事件など大事件大事故を興味本位で論じるもの。ましなところでは、新幹線計画に関わった島秀雄などの技術屋一代記、阪急、阪神、西武といった私鉄の創業者一代記。

これに加え、地元の名士が設立発起人となることが多く、一九六〇年代後半から

一九三〇年代、鉄道教習所中国人留學生の研究

七〇年代にかけての自家用車の普及や鉱山の閉山によって廃線となった中小私鉄、一九八〇年代後半の国鉄末期から一九九〇年代初頭のJR化直後に廃線または第三セクター線となったものの、経営難から廃線となった中小私鉄・ローカル線の、敷設計画から廃線となるまでの経過をその地域の情勢を交えて追った研究が近年増えてきている。

人ありてこそその鉄道なのに、それを動かす人材養成については無視されているといつても過言ではない。

鉄道は近代化には欠かせない交通機関であり、技術系職員の養成は不可欠である。そのため中国の上海には交通大学がある一方、日本の鉄道教習所に留學生が来ている。本論では、鉄道省が所管する鉄道教習所へ留學生が来た理由を考えてみたい。

一九三〇年代の中国国内での鉄道教育事情

留學生について論じる前に、一九三〇年代の中国国内では鉄道関係の教育がどのぐらい行われていたのかを、一九三六年版の『鉄道年鑑』^②から拾ってみると、「表1」ができる。

表中にある学校のほか、鉄道部直轄で高等中学校二校(天津、鄭州)、大学一校(上海本校、北平鉄道管理学院、唐山工程学院の二分校)がある。鉄道部は鉄道警察も自前で持っていたが、こちらは各鐵路が別個に、鐵路警察教練所(警察学校)を設け、警士(日本の巡査に相当)として採用した者に警察官として必要な知識と実技の教育を行っている^③。

大学から小学校まで所管しているうえ、各鐵路、工会(労働組合)、国民党支部と

設立母体はさまざまで、目的も學術研究と幹部養成の交通大学から、職員の子弟教育の扶輪中学、扶輪小学。字を知らない職員に対する識字教育まで入っている。しかも識字教育の教材は、『鉄道年鑑』の一九三三年度版から拾ってみると、一『悲壯的抗日雜歌』、二『国父孫中山』、三『急性伝染病的予防法』、四『民族之光』、五『不識字的下場』、六『總理遺囑積義』、七『勸識字』、八『破除迷信』……と、「悲壯的抗日雜歌」のように抗日意識を鼓舞するものから、日常生活に役立つ『急性伝染病的予防法』、学問を勧める『不識字的下場』、『勸学編』ならぬ『勸識字』、孫文の伝記『国父孫中山』、「革命未だ成らず」に始まる孫文の遺言を元に国民党の党義を説く『總理遺囑積義』……と様々である。

小学校まで部直轄で面倒を見なければならぬのは、人口の九〇パーセント近くが字を知らなかったというのもあるだろう。当時の中国国有鉄道職員の識字率は「表2」のような有様だった。

様々な教育機関があるが、各鉄路の職員養成所は現場職員再教育機関的色彩が強く、鉄道部直轄と膠済鉄路の高等中学は、日本の各地方鉄道管理局が所管する、旧制地方鉄道教習所、新制地方鉄道学園や、旧制岩倉鉄道学校、昭和鉄道学校、新制岩倉高校、昭和鉄道高校……といった職員養成を主とする学校ではなく、鉄道弘済会が経営していた旧制鉄道中学、新制鉄道高校（国鉄時代に鉄道弘済会・国鉄との縁は切れ、現在は芝浦工科大学付属高校）のような、職員子弟に中等教育を施す学校である。

最高学府の交通大学は鉄道部外者も受け入れなければならなかったうえ、鉄道管理はここでしか学ぶことができない。これはどこの国でもあてはまるが、高學歷者は本部の管理職種、低學歷者は現場での肉体労働になる。日本の鉄道現場でも、大学出の高等文官試験合格者は助役から職歴が始まったように、中国でも交通大学の鉄路管理学系を卒業すると、初任地の駅の副站长（日本でいう助役）、二年後には站长（日本でいう駅長）という出世⁴のに対し、低學歷者は、機関区なら、運行が終わった蒸気機関車の石炭ガラとススをかき出し、それが終われば水と石炭を補給、煤煙で汚れた機関車を磨く……という、日本の職階でいう炭水手、庫内手、駅ならば駅手、警手として貨物の積み下ろしや車両の人力入替、構内や客車の掃除という雑用、鉄道構内の警備、旅客の案内等に回される。

高級中学校を卒業して鉄道に入ってきた場合は、雑用、肉体労働ということはなく、日本で言う操車掛、運輸掛、電信掛といった、管理部門やデスクワーク主体の中堅職

種にいただろう。が、駅長、助役に出世するためには學歷が必要だと痛感したにちがいない。となれば上級職の試験を受けるため勉強するが、最高学府の交通大学は慢性定員超過状態⁵で、私立の鉄道専門学校、鉄路専科学院ができるのは、日中戦争開戦寸前の一九三六年六月である。

フランス、アメリカへは成績優等者しか行けないうえ、適格者は交通大学から選抜されることが多く、日々の勤務に追われる鉄道現場からは出づらい。しかし、銀相場の関係で、遠く離れたアメリカやフランスはおろか、国内の上海や北京の交通大学へ行くより、日本へ留学したほうが安いときもあり、パスポートも留学証明書もいらぬい、日本の在外公使や駐日公使の紹介さえあればよいとなれば、日本留学という選択肢⁶もできる。

国民政府期の日本留学は、交通大学を目指す高級中学生は「すべり止め」、中国国鉄の上級職を目指す若い鉄道職員は昇進するためのひとつの選択肢として、日本への留学を考えたのではないだろうか。

留日学生の派遣

前章では留学生を出した理由について述べた。では、どのような形で日本へ留学生を送り出したか、手続き面についてみていきたい。

交通部から鉄道部門が独立して鉄道部になった⁷、国民政府期の一九三〇年に定めた、「鉄道部選派留学規則」の「第三章 資格」の第五条によると、以下のようになっている。

- 第五条 本部留学生資格、以性行純良、身体健全、合於左列三種之一者為合格。
- 甲 凡交通大学学生、畢業成績優異、經部派実習一年以上認為工作成績良好者。
- 乙 凡在本部、或付属機関服務之職員、成績優異、由部核准、選派出洋研究鉄道或国道特種交通問題者。
- 丙 凡大學畢業、已在國外研習交通學術、成績優異、而無力繼續者。

甲は交通大学卒業生で一年間の実習成績良好な者、乙は部から交通問題について研究することを許可された者、丙は大学を終えて国外に渡り、交通について研究しているが学費その他の不足で続けられない者となっている。これらは国費で、定員も一〇

人内外と厳しく、また経済的理由からかアメリカ、ヨーロッパ行きが主で、日本は一九三三・三四年は一人もいない。無論、私費生の規定もある。

「国有鉄路職員自費赴国外実習規則」(一九三〇年三月三日公布)によると、⁸⁾

第二条 各鉄路職員、呈請自費赴国外実習者、須具有左列資格。

- 一、国内外各大学卒業者。
- 二、在路服務三年以上、精通留學國語言文字者。
- 三、在路服務成績優異、確在經驗者。
- 四、年齢四十歳以内、身体健全、儀容修整、而無不良嗜好者。

とあり、三年間以上鉄道現場で勤務し、勤務成績優良、品行方正で四〇歳以下、留學先の言語ができる者となつていて、留學期間中は休職扱いになる。

このような手続きで志願し、また選抜された留學生の願書などから日本留學の動機・理由を拾つてみる。外交史料館所蔵の「在本邦留學生便宜供与關係條件 鉄道省關係」⁹⁾で確認できたうちで一番古い、一九二三年から二六年までは、日本側は留學生の受け入れ規定や待遇を定めておらず、留學生の願書が三月までに来た場合は日本人學生と共に四月に正式に入所させ、卒業證書を發給するのに対し、四月以降に来た場合は聴講扱いで、證書も聴講證書と対応がまちまちだったのと、卒業、聴講いずれも入所時学力試験を行わなかったのが、学力面、素行面の問題もあったのか、¹⁰⁾一九二六年に、「東京鉄道局教習所専門部外国人特別入所規定」ができ、翌一九二七年からは特設予科として定員五〇名、一年間の予備教育を行つてから、日本人學生とともに専門部一年に入所させている。

『鉄道時報』一九二六年五月二九日付通巻第一三九〇号「東教専門部の外人入所規定」に掲載された条文によると、¹¹⁾

- 第一条 外国人ニシテ東京鉄道局教習所専門部ニ於テ一般ノ規定ニ依ラズ所定ノ学科ノ一科若クハ数科ノ教授ヲ受ケントスルモノハ、外務省在外公館又ハ本邦所在ノ外国公館ノ紹介アルモノニ限り特ニ之ヲ許可スル事アルベシ。
- 第二条 前条ニヨリ教授ヲ受ケントスル外国人ハ、前条ノ紹介状ヲ添ヘ鉄道大臣ニ願出スベシ。

第三条 鉄道大臣ニ於テ前条ノ出願ヲ受ケタル時ハ、相当ノ学力アリト認メタル者ニ対シテ設備上差支無キ場合ニ限り之ヲ許可スルモノトス。

第四条 本規定ニヨリ入學シタル外国人ニシテ学科合格ノ証明書ヲ受ケントスル者ニハ試験ノ上、同ク聴講ノ証明書ヲ受ケントスル者ニハ出席狀況ヲ參按シテ之ヲ附与スルモノトスル。

(五条以下省略)

とあり、これによつて履歴書の書式を定め、一九三〇年の『志願心得』によると、¹²⁾

三 志願手續

入學願書(書式第一号)ニ履歴書(書式第二号)及写真(最近六箇月以内ニ撮影セル半身脱帽ノ手札形ニシテ台紙ナク且其ノ裏面ニ氏名ヲ自署シアルモノ)ヲ添ヘ、二月二十日迄ニ駐日支那公使館ニ提出シ、支那公使館ハ之ヲ一括シ日本帝國鉄道省ニ三月十日迄ニ到達スル様日本帝國外務省ニ提出スルモノトス。但シ日本帝國在外公館ノ紹介アルモノハ右ニ準シ直接外務省ニ提出スルモノトス。

前号ノ要件ヲ具備セザル書類ハ一切之ヲ受理セス。入學願書ヲ受理シタル時ハ直接本人へ或ハ關係ノ向キヲ經テ本人へ受験票ヲ送付ス。

とあるように、中国国内から出願する場合は日本の公使館・領事館を経由して鉄道教習所に送るルートもできている。満州国出身留學生も、同じ書式で、同じく日本の在外公館を経由して鉄道教習所に送られている。学事上の手続きはともかくも、学生生活では満州国留學生と中華民國留學生を区別したような形跡は見られない。というのも、鉄道教習所の留學生は中国からが大半だったが、規定の名前が「外人入所規定」となつてるように、他の国からの留學生の来日も見越しての制定だったようである。また、留學生は日本人學生のように寮ではなく、通所にしており、また中華民國・満州国で独立して學級を作るほどの人員・予算・教室・教材がなかったため、授業は合同で行つてゐるようである。断言できないのは、日本側も含め、鉄道教習所・鉄道學園に關しての史料が非常に少なく、また鉄道史が長年「マニアの歴史」に偏重していたうえ、歴史學の立場からは利権、借款、労働運動に力点を置いた研究が続いてきたため、人材育成については二の次三の次にされてきたからである。

履歴書は、学生を教える鉄道教習所側に送られる性質のものであるから、当事者の鉄道教習所にあるはずだが、鉄道教習所は一九四五年四月一三日の空襲により焼失したのと、その後の国分寺への移転、国鉄の分割民営化によつて資料が散逸してしま^⑧い、筆者の管見の限り発見できたのは、外交史料館に「在本邦留学生便宜供与關係雜件 鉄道省の部」としてファイルしてあった、一九三六年から四〇年までしかない。これは出願者全員を保存してあり、合格者、实在籍者しか掲載しない、日華学会が出す留学生名簿の中にも見出せるうえ、留学の背景も読み取れる。

これを元にして、留学生の来日理由を見てみる。

履歴書の内容は、氏名、生年月日、志願学科、本籍と現住所、職歴、学歴、得意科目に加え、来日日時、学費支給先、派遣者の官職、帰国後就職を予定する鉄道、妻子の有無、父親や家族の氏名職業、嗜好と趣味、紹介者、記事となつていて、下記の通りである。なお、手書き部分は区別するためゴシック体にし、空欄はそのままである。

入学願書

今般東京鉄道教習所鉄道局専門部二入学志願ニ付テハ御許可相仰度此段奉願候
昭和十一年 月 日

(氏名印) 林崇信 (印)

鉄道大臣 殿

志願科目 特設予科(機械科)

生年月日 中華民國紀元前一年十月三日(二十六歳)

本籍 中華民國広東省英徳県

現居所 東京淀橋区諏訪町二五〇常磐館

学歴及職歴 中華民國中国公学本科政治系三年級修業

得意ノ學術技能 機械工程

日本来朝ノ年月日 昭和十年十月十日

日本滞在見込期間 五年

学費支弁ノ区別 私費

派遣者官職氏名 中華民國国民政府鉄道部

帰国後就職見込ノ鉄道 広三鐵路

本国知己ニシテ本国鉄道ニ従事スル者ノ職氏名

妻子關係 妻 有 子 男 人 歳

無 女人 歳

父兄ノ氏名職業及現住所 兄林燦三、英徳県長、英徳県政府

嗜好及趣味 運動 音楽 書籍雜誌

紹介者 東京市神田区西神田一ノ三 日華学会内高橋君平 財団法人日華学会(印)

一九三六年の入所希望者の願書は、中華民國は三月二十五日に在日公使館、満州国は翌二六日に在日大使館が外務省に送っている。総計は、民国一二一名、満州国六二名で、民国側は志望学科も分けており、業務科六四名、機械科二〇名、土木科二三名、電気科一三名となつている。紙幅の都合上、一八三名全員を取りあげるわけにはいかない。また、満州国籍は一九三六年度で二名のみしかファイルされておらず、中華民國出身者がほとんどになった^⑨。それを表にしたものが「表3」である。

履歴書では、面白いことが見出される。たとえば、鉄道大臣の名を空欄にしている物と、書き込んだる物と二通りある。鉄道大臣の名前が空欄なのは、中国国内で願書を書いた時点では鉄道大臣の名前がわからないからだろう。また、日本国内での住所が本人の直筆ではないものもある。来日後、下宿先の大家に書いてもらったものと考えられる。

また、願書の年号は、民国で書いている者、大正、昭和と日本の年号を使っている者、併記する者、西暦を使用する者とまちまちである。生年月日の欄で、生まれた時点ではまだ清朝だった者は、清朝の年号である光緒、宣統を使う者がほとんどだが、中華民國紀元前と書いている者がただ一人いた。例に挙げた林崇信である。

左記に、履歴書中から特記事項のある者を選び出した。とくに断らない限りは中華民國出身者で、名前の上に○があれば合格、×は不合格である。

鉄道関係者

× 錢楷 (業務科志望)

○ 錢杰 (業務科志望)

この二名は、兄弟である。膠濟鐵路高中出身。父親は膠濟鐵路の総務処長の錢鋪で、就職希望先も膠濟鐵路となつている。

×程士俊（業務科志望）
彼の父親程歩青は津浦線・平漢線の技師。

○楊元錡（業務科志望）
兄の楊元藻は平綏線包頭駅駅長。

○楊開運（業務科志望）

原史料では、兄の楊開藩は「湘鄂通段長」とある。通信・信号関係部署の段長（現場長）だろうか。

×于耀宗（業務科志望・満州国人）

父親の于雲鴻は満鉄勤務者で、就職予定先は満州国の鉄路総局。

○李尚志（土木科志望）

彼の父親李高華は、膠濟鉄路の駅長を七年間勤めている。

○蕭綱（土木科志望）

兄、蕭組は平漢鉄路警務段長。

一族の誰かしらが鉄道に関係する者もいれば、現場勤務経験のある者もいた。

鉄道現業出身者

○鄭兆麟（業務科志望）

中山大学付属高中から中山県公路南路管理員。

○潘兆嫻（業務科志望）

広三鉄路仏山駅勤務。

×龍啓乾（業務科志望）

津浦線見習勤務。

×陳周牙（業務科志望）

台山高中出身、台山鉄路勤務。

○区応乾（業務科志望）

粵漢鉄路在勤（書記）。兄も同鉄路勤務。

×鄒清如（業務科志望）

師範学校から教員を経て南潯鉄路涂家站站員。駅長から留学を命じられる。

×高邁甲（業務科志望）

南潯鉄路の事務員。

現場経験者のほとんどは高中出身で、先の私費留学規定には当てはまらない。休・退職し、日本へ渡ってきたのだろう。だが、

○謝恩（業務科志望）

は鉄道部より留学を命じられている。研究生として選抜された者と思われる。

×林崇信（機械科志望）

中国公学政治系出身。

×宋毓琥（業務科志望）

天津市立法制専門学校付属高中卒。県税務主任、教師

×王純伯（業務科志望）

南通学院付属高級紡織職業学校出身

×朱祿曾（業務科志望）

中山大学付属高中卒。同校教員から鉄道界へ

といった鉄道とは全く関係ない世界からの転身組や、

×黃天福（業務科志望）

本籍は台湾。台湾の嘉義商工専修学校出身。派遣者は台北中華民国総領事。

×何乘謙（業務科志望）

横浜の華僑。旧制本牧中学卒業。本籍は広東省。

×張慶安（機械科志望）

父親は東京麻布で商業に従事。

○陳卓然（機械科志望）

父親は朝鮮で商業に従事。

のような、日本の在外領土や、日本国内・国外在住の華僑が受けること¹⁵もあり、年に一人か二人はいる。

一九三六年度の履歴書を見ると、在職者・経験者、二代目はもちろんだが、他業種からの転身者や高級中学からの進学組もいて、民国出身では一二一名中六四人が業務科志望になっている。鉄道教習所専門部業務科は、交通大学では管理科に相当する学科である。

留学生の中の鉄道勤務者、勤務経験者の中には、退職している者もいる。休職なら元の鉄道に復帰できるが、退職の場合、鉄道に就職できるとは限らない。機械科、電気科、土木科は、鉄道主体とはいえず、日本の高等専門学校や大学の同様の科目を学ぶので、帰国後他の職業への就職も楽だろうが、交通経営学というべきことを学ぶ業務科に入るとなると、帰国後の就職先は、鉄道・バスなどの運輸関係でないと、学んだことを生かすことは難しい。留学生に関しての個人史料がないので想像の域を出ないが、帰国後なんとかなるだろうという楽観的な者もいれば、鉄道教習所不合格の場合どうしたものかという、背水の陣で試験に臨んだ者もいるだろう。

また、家族関係の欄で、父または兄、親戚が鉄道員以外に、国民政府、省政府、県政府とさまざまだが、公務員、高級中学（日本の旧制高校に相当）、初級中学（日本の旧制中学に相当）の教師、中央銀行である中国銀行の銀行員、さらには各地で商売を営んでいる者がいる。全員が家族関係や派遣者などを記載していないので、履歴書の内容だけで留学生の経済的背景・思想的背景を断言するのは難しいが、日本へ留学させられるだけの金銭的余裕があるか、あるいは人脈を生かし、日本という国を知るための留学が行われていたと考えられる。さらに当の留学生にしてみれば、鉄道教習所を中国の交通大学や日本の高等学校、大学に等しい存在とみなしていたのではないだろうか。

だからこそ、前述のように鉄道員として勤務している者が休職・退職してまで受験するほか、

吾が教習所の名称も名実相副ふやう、庶わくは鉄道大学ぐらいの名称を用ひて頂き、卒業生の実社会へのスタートを大学卒業生と同等にして頂き度いと希望する次第であります^⑥

と、業務科二年在学の朱覚生が一九三五年二月一日に行われた、鉄道教習所学生懇話会で発言し、また、「表4」が示すように、受験者に高級中学・中学出身者が多いのだろう^⑦。

おわりに

以上、一九三〇年代の鉄道留学生を見てきた。鉄道部内にある向上心のある現場職員と鉄道界を目指す高級中学生が、日本の鉄道教習所を中国の交通大学と同等もしくは次ぐ存在とみなしていたからこそ、最盛期には二〇〇人近い学生が特設予科の試験を受け、日本留学を選んでいく。これは、社会的昇進のための留学である。また、鉄道教習所が交通大学を補完する関係にあったとも考えられる。

満州国成立後の民国・満州国留学生の区別は、事務手続き上は区別したものの、学生生活では席次を分ける程度だった。陸軍士官学校のように「中華民國学生隊」、「満州国学生隊」として一個中隊（平時編成で中隊長以下二〇〇名前後）を編成しなければ、実習に差支えがあるほどではなかったからとも考えられる^⑧。

留学生の帰国後については、多数の留学生史研究者が問題にしているが、日中関係の険悪化と日中戦争、国共内戦の戦火、根強く残った反日感情によって留日経験を口外できない環境になったため、不明なことが多い。また、清朝期の鉄道留学生については、在籍していたことが言及されるのみで、個別の学校での対応や学生の動向などは省略されている。

鉄道教習所は一九一九年に留学生を受け入れているが、その年は鉄道部外者からも入学を許可している。さらに一九二六年の外国人入所規定の制定と翌年の特設予科一年の創設は、鉄道省直轄から東京鉄道管理局所管と格下げになり、旧制大学と同等で、高等文官試験合格者を多数出して学生の人気を集めた高等部が廃止され、志望者が減ると見こまれたうえ、中学レベルの教育を行った普通部まで廃止がささやかれるような時期だった。日本側は、日本人学生が集まらないときに教習所の教官定員や予算、設備を確保するための一種の「切り札」として、留学生を見ていたのではないだろうか。上記三点については史料の都合もあり、日本側の研究と合わせ、今後の課題としたい。

註

- (1) 留学生が在所している時期だけでも、鉄道省中央鉄道教習所、東京鉄道管理局東京鉄道教習所など数回所管と名称が変更されているが、本論文では統一して鉄道省所管の東京鉄道教習所と呼ぶ。また本文中の「満州国」の「」は便宜上省略する。日本には元号、中華民國には民国という独自の暦があるが、読者の利便と紙幅の

都合から西暦に統一した。鉄道教習所の日本人学生の動向については、三上氏の論文が詳細を極めているので、拙論文では省略する。

(2)『鉄道年鑑』は、日本の国鉄時代に刊行された『日本国有鉄道鉄道統計年鑑』と『鉄道要覧』に相当する存在で、輸送人員、扱い貨物量等のデータもある。

(3)日本の鉄道警察は、一九四六年、敗戦に伴う治安悪化期に、国鉄の敷地および運行する列車内に限り警察官としての職務を行なうことのできる特別司法警察官として警察官類似の制服を着用し、専らその任務に当たる鉄道公安官制度ができるまで、司法大臣の任命する駅長、車掌区長、車掌区助役、駅助役と車掌が兼任するか、必要に応じ各都道府県警察の警察官が私服または制服で警乗する程度だった。任務も駅構内、運行する列車内での治安維持、悪質な不正乗車の検挙、貨物の盗難予防などで、鉄道職員兼任者は、取締りの色彩はなるべく出さないよう鉄道大臣の指示が出ている。中国の場合は右記業務も行なったが、馬賊・匪賊と呼ばれる集団の賊から鉄道とそれに付属する鉄橋、電信線、運行する列車の防衛を主任務にしていた。

(4)外務省外交史料館所蔵、「在本邦留学生便宜供与関係雑件 自費生の部」(H門5類0目1号の1 以下外交史料館所蔵史料はファイル名と請求番号のみ記す。)にある衛兆(一九四一年に早稲田大学政経学科入学希望)の履歴書によると、彼は交通大学を一九三六年に卒業し、同年八月北寧鉄路の見習として配属、そのうち同鉄路の副站长、翌年には京包鉄路の站长を経て人事科勤務となっている。

(5)一九二〇〜三〇年代の中国での文系学生・理系学生の不均衡はひどく、一九三三年の教育部の調査では、文系三二九、四〇〇名、理系一一二、二七〇名となっていて、同年から教育部所管の大学では、文系学部の新集制限と理系学部の設置援助を行っている。(数字の出典は世界教育史研究会編、『世界教育史四 中国教育史』(講談社、一九七七)の一九五頁より。)

(6)周一川氏の「南京国民政府時期の日本留学」(『中国人日本留学史研究の現段階』大里浩秋・孫安石編、二〇〇〇、お茶の水書房)の二二二頁〜二二五頁によると、教育部の許可やビザはおろかパスポートもいらず、日本の学校の合格証書さえあればよいという状況だった。

(7)『鉄道年鑑』一九三四年版、五五八〜五七二頁。

(8)同右

(9)H56013「在本邦留学生便宜供与関係雑件 鉄道省」一冊目
(10)H5601「在本邦留学生関係雑件」二冊目の中にある『内報』(一九二四年六月三日付、第二〇〇号)によると、一九二三年入所の学生が、同郷団体の名前を騙って寄付金を集め、着服したという疑惑が持ち上がっている。

(11)『鉄道時報』一九二六年五月二十九日付
(12)H56014の「在本邦留学生便宜供与関係雑件 警察の部」に入っていた。

(13)学籍関係の書類は日本人学生のもも現在所在不明で、日中間わず鉄道教習所についての研究を行ううえで重大な支障をきたしている。所在をご存知の方は筆者までご連絡ありたい。

(14)履歴書はH56013の「在本邦留学生便宜供与関係雑件 鉄道省」の二冊目、三目にあり。

(15)日華学会発行の名簿によると、一九三二年の岩倉鉄道学校には、横浜の華僑の学校である中華学校出身者が四名在籍している。そのうちの一人が広東省派遣の警察留學生として一九四〇年に再来日している。また、一九三四年版には劉其偉(神戸イングリッシュ・ミッションスクール出身)、黄宇堅(タイ国バンコク出身)がいる。

(16)日華学会学報五四号、一九三六年二月付四六〜四七頁。

(17)H56013の二冊目、三冊目に見られる、「満、中国学生学籍除去ノ件」の退学理由には、無断欠席や学力不足による落第以外に他学校への転出もあり、留學生の鉄道教習所感については、今後詳しい分析が必要だろう。

(18)陸軍士官学校では、各中隊を中心に実技学科の教練を行なう。そのとき分隊長、小隊長、中隊長を全員が順番で務める。また、軍機保護のため、日本人学生とは別個の教案が組まれていた。

表1 1934年現在での中国鉄道部所管の教育機関

	津浦	北寧	正太	平漢	平綏	隴海	粵漢路湘鄂段	粵漢路南段	京滬杭甬	膠濟	広九	南潯	道清
扶輪小学校（鉄道部直轄）	8	9	3	9	10	7	5		8				
員工子弟小学校（各鉄路所管）	9			17	1	9		1		7		1	
員工子弟中学校（各鉄路所管）										1			
養成所（各鉄路所管）	3			2	6	5		1		2			
職工学校（各鉄路所管）		6	3	10			4		6				1
職工学校（工会所管）								6		6	1		
職工学校（国民党所管）						10							

1936年度版『鉄道年鑑』「第6章 教育」をもとに筆者作成

表2 1930年時点での中国国鉄職員教育普及率

教育レベル	人数
不識字	47,740
略識字	3,200
識千字以上	290
私塾2年以下	20,199
私塾3年以上	2,076
初級小学校修業	1,038
初級小学校卒業	1,648
高等小学校修業	592
高等小学校卒業	1,469
初級中学校修業	263
初級中学校卒業	174
そのほかの学校	1,371
総計	98,560

1934年度版『鉄道年鑑』「19年全国鉄路職工教育程度統計表」をもとに筆者作成

表3 鉄道教習所1936年入所希望者一覧

業務科

氏名	年齢	出身地	来日前の学歴	来日前の職歴・特記事項
王純伯	23	江蘇省鎮江県	南通学院付属高級紡織職業学校卒	
王心清	24	山西省垣曲県	北平財政商業高級中学卒	
王鳳来	23	山東省濮県	北平大学付属高級中学卒	
何秉謙	25	広東省南海県	横浜市立本牧中学校卒	横浜市居住の華僑。中華学校から日本の中学校へ進学
韓蔭澧	24	山東省安邱県	上海大慶中学2年中退	
魏瑞慶	23	浙江省慈谿県	上海光華大学商学院1年中退	
区広乾	24	広東省新会県	広東省法科学院大学部本科3年中退	粵漢鐵路書記。兄も粵漢鐵路職員
嚴奎栄	21	広東省恵陽県	広東省南海県県立高級中学卒	
伍展培	22	広東省台山県	広州培正高級中学卒業	叔父伍士焜は国民政府監察委員会委員兼秘書
呉鐘奇	21	江西省臨川県	復旦大学付属高級中学卒	親戚范致遠は南潯鐵路管理局局長
呉占材	21	広東省南海県	広州市聖心高級中学卒	粵漢鐵路南段管理局車両区長程耀楠(男)、呼海鐵路保線区長史羽六(義兄)、浙贛鐵路車両区長呉毓崑(叔父)
呉兆端	22	江西省宜黄県	江西省省立高級中学卒	
黄天福	19	福建省閩侯県	台湾公立嘉義商工専修学校卒	民国台北総領事張振漢、瀧南路幹事林澄波が派遣者
黄伯衡	22	広東省瓊山県	江南学院政経系卒	
高邁甲	23	河北省天津市	天津工商学院高級中学卒	南潯鐵路事務員
謝恩	27	江蘇省武進県	交通大学卒	鉄道部より留学を命じられる。生年月日に西暦を使用
周長英	21	江蘇省無錫県	成城学校留学生部卒	
周睦盛	27	広東省大浦県	暨南大学卒	父親はシンガポール在住の商人
朱子芳	24	広東省台山県	香港塘新書院卒	
朱禄曾	26	浙江省海塩県	新民大学卒	浙江省杭州中山中学の教員
蔣卓森	25	広東省新会県	広州市高級中学卒	父親はアメリカ・ニューヨーク在住の商人
雛清如	22	江西省新淦県	江西省省立郷村師範卒	南昌県立敷林小学校教導主任・南潯鐵路涂家站職員・駅長より留学を命じられる
施征夫	26	広東省瓊山県	中国公学大学部卒	
錢楷	21	湖北省漢市県	膠濟鐵路高級中学卒	父親錢鏞は膠濟鐵路の総務長
錢杰	23	湖北省漢市県	膠濟鐵路高級中学卒	父親錢鏞は膠濟鐵路の総務長
銓志循	24	広東省南海県	広州大学1年中退	
宋毓琥	32	河北省楽亭県	天津直隸省立法政専門学校商科卒	県政府税務主任・中学教員。兄は鉄道管理局の事務主任・義兄は駅長・鉄道教習所に知人留学中
陶志堯	25	山東省鉅野県	私達中学卒	父親は出身地で農業を営む。地主か?
戴佐棠	21	湖南省湘潭県	湖南長郡連立高級中学卒	父親戴星炳は軍人。第4集団軍参議 生年月日を西暦で記載
譚漢鏡	23	広東省新会県	サイゴン旦華高級中学卒	
張正呉	23	安徽省歙県	燕京大学理科1年中退	津浦鐵路実習生。管理局より留学を命じられる。父は南京の鉄道部勤務
張廷驥	23	江蘇省銅山県	北平弘達高級中学卒	父親張冠五は国民政府軍事委員会上将参議
張秉堃	24	河北省天津市	北平私立鐵路大学1年中退	知人が北寧鐵路の人事課に勤務。本人も北寧鐵路就職希望
趙秉壮	22	広東省台山県	香港のミッション系高級中学卒	粵漢鐵路南段管理局車両区長程耀楠より留学を命じられる
陳家謨	23	江西省峡江県	私立持志大学付属高級中学卒	
陳周牙	25	広東省台山県	台山県立高級中学卒	台山鐵路職員

程士俊	23	山東省商河縣	北平文治高級中学卒	父親程步青は津浦鐵路事務所技師。
鄭兆麟	22	広東省中山縣	中山大学付属高級中学卒	中山縣公路南路業務管理員
鄧夢九	22	安徽省安慶縣	南京東方高級中学 2 年中退	父親鄧素存は上海市吳淞警察所所長
馬卓廷	22	広東省台山縣	私立広州大学 1 年中退	台山鐵路職員
潘兆銓	23	広東省南海縣	中山大学付属高級中学卒	広三鐵路仏山駅勤務
潘飛	23	江西省婺源縣	上海大慶高中学卒業	
潘文達	22	浙江省諸暨縣	弘達中学卒	願書學歷欄は日本語で記入
馮国桓	22	広東省南海縣	広東省法科学院高級中学卒	
方平	25	広東省開平縣	知用高級中学卒	台山鐵路職員（2 年間勤務）派遣者は台山鐵路局長。叔父方嶸は同庶務科長
鮑士魁	23	河北省北平市	中国の東北大学 2 年中退	
包尚浚	22	江蘇省寿賢縣	光華大学付属高級中学卒	
楊開運	24	湖南省沅陵縣	輔仁大学 2 年退学	天津扶輪鐵道中学卒。兄楊開藩は湘鄂鐵路の通段長
楊元錡	23	福建省閩侯縣	香港中南美文書院卒	兄楊元藻は平綏鐵路包頭駅長
廖俊清	27	広東省防城縣	暨南大学法学院政治系卒	
廖汝翼	23	四川省雲陽縣	上海正始高級中学卒	
駱開道	23	広東省龍川縣	光華大学商科 2 年中退	
李志遠	21	江西省余平縣	南昌贛省高級中学卒	知人、親戚が鐵道部本部勤務
李增栄	27	山西省沁縣	開州学院法律学系卒	父親李瑞華は山西省の塩務視察員
劉捷煌	24	広東省興寧縣	南京高級中学卒	広東省第 1 集團軍總司令工程処長が派遣者。親戚曹養浦は鐵道部次長
龍啓乾	22	雲南省蒙自縣	朝陽大学卒	津浦鐵路見習生。管理局より留学を命じられる。西曆で生年月日記載
林炳昌	26	広東省新会縣	広州培英高級中学卒	
林祖沢	23	広東省新会縣	郁文学院經濟系卒	
梁日東	22	広東省順德縣	知用高級中学卒	
黎耀雄	22	広東省順德縣	広州大学 1 年中退	
呂弼周	23	浙江省永嘉縣	広州市青年会立高級中学卒	學歷は日本語と中国語並記

機械科

氏名	年齢	出身地	来日前の學歷	来日前の職歴・特記事項
王培義	22	江蘇省鎮江縣	南通学院高級紡績職業学校卒	
王保恒	22	江西省修水縣	安徽高級中学卒	父親王松游は平漢鐵路管理局の第 2 課長
魏善鍾	22	江蘇省沐陽縣	上海浦東中学、日大日本語專修部卒	「魏裕尋は膠濟鐵路に従事している」と記述。血縁関係は不明。
何東亨	23	広東省順德縣	広州市大学付属高級中学卒	
賈廉懷	24	江蘇省宜興縣	上海持志大学法科卒	父親賈士毅は湖北省財政長
倪志庸	26	江蘇省塩城縣	日本の專修大学専門部法科卒	
顧宝漣	20	江蘇省金山縣	光華大学 1 年中退	
江宏俊	23	江西省婺源縣	光江大学 1 年中退	兄江伯鏞は中国銀行寧波支店勤務
謝斌	23	広東省惠陽縣	広東省南海縣立高級中学卒	親戚が粵漢鐵路勤務
張慶安	22	浙江省鎮海縣	光華大学付属高級中学卒・東亜学校卒	父親張紀来は麻布飯倉で商業に従事
張広基	22	江蘇省吳江縣	河北省潞河高級中学卒	父親張德鳳は中国銀行太原支店勤務

張秀豪	25	江西省樂安縣	心遠高級中学卒	
趙得凱	24	山西省趙城縣	北平弘達中学卒	叔父趙仏軒は同蒲鐵路機関區長
趙立森	22	江蘇省泗陽縣	復旦大學理學部1年中退。東亜學校卒	親友趙春元は1935年より膠濟鐵路に勤務
陳壽民	22	福建省閩侯縣	福達學院高級中学卒	知人に業務科受験の楊元錡の名をあげる。
陳卓然	23	河北省定興	河北省民衆教育實驗學校卒	父親は朝鮮で商業に従事。
馬希援	21	雲南省元江縣	雲南省立昆華中学卒	
彭可堪	23	廣東省南海縣	南海縣立高級中学卒	
林崇信	26	廣東省英德縣	中国公學政治系3年卒	兄は英德縣の縣長。生年月日に「中華民國紀元前」と表記
梁敬潼	21	廣東省南海縣	南海縣立高級中学卒	兄梁覺農は粵漢鐵路の役員
楊祿學	23	四川省長壽縣	青島市立高級中学卒	父親楊範五は青島市電の職員

土木科

氏名	年齢	出身地	来日前の学歴	来日前の職歴・特記事項
汪鶴齡	23	安徽省巢縣	東方高級中学卒	兄汪錦榮は隴海鐵路の鄭州車頭廠長
王景南	25	浙江省永嘉縣	浙江省立高級中学卒	
何浩光	21	廣東省東莞縣	嶺南大學高級中学卒	
黃維靜	23	廣東省梅縣	廣東大學附屬高級中学卒	親族は廣東省の農政に関与
甄建堯	21	廣東省台山縣	上海復旦實驗高級中学卒	
朱寬瓊	23	廣東省台山縣	暨南大學化學系2年中退	上海の貿易關係の役所に1年勤務
蕭綱	23	廣東省中山縣	香港大華書院卒	兄蕭組は平漢鐵路警務段長
徐先良	20	江西省鉛山縣	鉛山縣七縣共立鷺湖高級中学卒	従兄徐榮は南尋鐵路の駅長。父親は出身學校の教務長。
徐宝明	25	浙江省杭縣	浙江省立測丈人員養成所卒	
陳辰	22	江蘇省丹徒縣	南京樂育高級中学卒	
陳長佑	20	廣東省東莞縣	廣東勤勤大學附屬高級中学土木科卒	
陳伯遼	21	福建省長樂縣	福州市私立三山高級中学卒	
趙震	21	江蘇省丹徒縣	江蘇省立水產學校卒業	
趙文充	22	江蘇省武進縣	上海復旦大學土木科卒	父親趙雨圃は中国銀行勤務。紹介者は中国銀行大阪支店支店長
張俊才	22	四川省広安縣	上海同德医学院2年中退	
翟士瑛	25	山東省天津縣	華北省立第1中学卒	
羅學文	24	廣東省大埔縣	汕頭市私立廻閣高級中学卒	帰国後の志望は潮汕鐵路の鉄道學校教員
李兆倫	22	広西省蒼梧縣	廣東省南海高級中学卒	
李尚志	20	山東省高家縣	青島市立高級中学卒	膠濟鐵路に父親李嵩華は勤務(駅長7年)叔父は辛莊駅の駅長として勤務中
劉同春	23	山東省莒縣	天津南開高級中学卒	同校に卒業後1年勤務とある。
林揚義	23	福建省莆田縣	上海私立大夏大學2年中退	中退した大學の学長(前交通部長王伯羣)が派遣者
盧孟豪	20	廣東省中山縣	上海公仁中学卒	
余富成	22	四川省邛峽縣	四川省成都尚志高級中学卒	

電氣科

氏名	年齢	出身地	来日前の学歴	来日前の職歴・特記事項
殷国璠	23	安徽省六合県	北平財政商業専門学校高級中学卒	前交通総長呉毓麟、隴海鉄路局長銭宗沢が親族。兄殷国璋は津浦鉄路塘荘富廠の長
郭可琮	23	福建省閩候県	北平育英高級中学卒	隴海鉄路工務処司事。派遣者は同鉄路工務段長。父親は外交官でインドネシア・スラバヤ勤務
江之著	23	安徽省歙県	上海中国無線電工工程学校卒	
黄景清	21	広東省順徳県	中山大学付属高級中学卒	血縁者、黄炬香は粵漢鉄路の会計主任。
黄維鎮	23	広東省梅県	香港大華書院卒	
謝雲龍	23	江蘇省江甯県	天津私立新楽高級中学卒	膠済鉄路の総務長銭鏞を知人にあげる。兄は天津の日本租界在住の学者か教師
劭子澂	21	浙江省長興県	復旦大学実験高級中学卒	
陳訓愿	26	江蘇省慈谿県	上海中国無線電工工程学校卒	上海で無線関係の保守点検会社に勤務。
莫家励	22	広東省連県	中山大学付属高級中学卒	
劉采烈	22	湖北省天門県	山西省雲山高級中学卒	願書は「管理科」となっているが、電氣科にファイリングされていた
羅広超	21	広東省南海県	中山大学付属高級中学卒	羅慶祥業務主任が派遣者。郵政局勤務。
廖棟湖	21	広東省台山県	南海県立高級中学卒	
林兆豊	24	福建省閩候県	匯文高級中学卒	隴海鉄路商邱工務処司事。派遣者は父親で隴海鉄路工程師兼工務段長林秉珪
呂興華	22	山東省海陽県	膠済鉄路中学卒	

外務省外交史料館所蔵「在本邦留学生便宜供与関係雑件 鉄道の部」収録の履歴書を元に筆者作成
異体字は通用書体に直した。

表4 1927、31、33、34、36年度鉄道教習所特設予科入学者学歴表

1927年度					31年度				
	業務科	機械科	土木科	電気科		業務科	機械科	土木科	電気科
	18	2	10	3	中学	9	1	4	3
高中					7		5		
専門									
					大学	7	1	2	
33年度中華民国					33年度満州国				
	業務科	機械科	土木科	電気科		業務科	機械科	土木科	電気科
中学	1	1	1		中学	1	2	1	
高中	1	1	1		高中	4			2
専門	1				専門				
大学	1				大学				
34年度中華民国					34年度満州国				
	業務科	機械科	土木科	電気科		業務科	機械科	土木科	電気科
中学	5			4	中学	7	2	1	1
高中	4			1	高中	15	1	1	
専門				1	専門				
大学	10				大学	5		1	1
36年度中華民国					36年度満州国				
	業務科	機械科	土木科	電気科		業務科	機械科	土木科	電気科
中学	6	1	4	1	中学	11	3	1	3
高中	3	1	8	5	高中	1	1		3
専門				1	専門	2	1		
大学	7	3	2		大学	1	1	3	3

凡例1：中学には師範学校、実業学校、高中には大学予科を含む

凡例2：1932年度は入学者はなし、35年度は史料が発見できず

凡例3：1927、31年は原史料が満州国国籍と中華民国国籍を分けていない。

凡例4：1927年度の学歴は原典資料になし

1927年度は『大学課程史年表』（中央鉄道学園 1975年）1931年度は『留日中華学生名簿』、1933、34、36年度は『留日学生名簿』（いずれも日華学会発行）をもとに筆者作成

本論文は、鉄道省鉄道教習所、内務省警察講習所に留学した、一九二〇年代から三〇年代の中国籍留学生の動向などについて調査したものである。第一章では鉄道省鉄道教習所（日本国有鉄道中央鉄道学園となり、国鉄民営化後廃止）、第二章、第三章では内務省警察講習所（現在の警察庁警察大学校）を取り上げる。

一八九六年から一九四五年までの約五〇年間の中国人の日本留学史については、実藤惠秀氏、永井算巳氏以来研究が続いている。しかし、先行研究は辛亥革命に関連づけてのものや、文部省が所管する旧制大学等を主としたもので、文部省所管外の学校については、留学生の存在には言及するが、具体的な論考はなかった。

また、一九三七年の日中戦争開戦以降も、汪兆銘の南京政府など親日政権から中国人留学生は来ているが、先行研究では、台湾、関東庁、満州国も含め、「親日派の養成のため」といった先入観で決めつけてかかり、無視あるいは軽視していた。

よって論者は、近代国家として必要な交通を支える、鉄道技術者を養成した鉄道教習所と、近代国家には欠かせない、法制度に密接に関わる警察官を養成した、警察講習所の一九二〇年代と四〇年代の留学生に着目した。

第一章、鉄道編

一では一九二〇年代の留学理由、二では国民政府期の鉄道教育事情、三では留学生の派遣手続と外交史料館に所蔵されていた、一九三六年の入所希望者の願書を使つての留学理由の考察、四では日本側の対応について触れる。

中華民国成立後は各地に軍閥が割拠し、互いに覇権を争っていた。当初、列強各国は借款という形で国策に合致した軍閥に資金援助していたが、一九一九年のヴェルサイユ条約締結と五・四運動で湧き上がったナショナリズムと国際世論により、各国は援助できなくなった。

軍閥は、産業の一つであり、交通機関の鉄道に目をつけ、借款国の外国人顧問がいようが営業収入を戦費とし、軍用列車の運行を強要。退却時には施設を破壊していった。交通部と各鉄路は、軍閥から鉄道と付帯財産を守るため置いていた外国人職員が役に立たないので、鉄道教習所へ幹部候補の留学生を送り出した。

一九三〇年代の中国国有鉄道の教育は、上海の交通大学で学術研究と幹部養成を行なう一方、高級中学（日本の旧制高校に相当）から小学校までを設立し、職員の子弟に対して各種の教育を行なっていた。交通大学を卒業した者は、初任地で助役から職歴が始まるのに対し、低学歴者は、駅手、警手といった肉体労働、雑用から始まる。一九三〇年代は、交通大学を目指す高級中学生は、「すべり止め」、中国国鉄の上級職を目指す若い鉄道員は、立身出世の一つの道筋として日本留学を考えたのではなからうか。

外交史料館所蔵の一九三六年入所希望の留学生の願書の分析を行なったところ、中国の鉄道で勤務経験のある者、または在職中の者、父親、兄弟で日本に関係のある職業についている者が多数見受けられたのが、証左である。

第二章、警察編

一では中国における近代警察制度の略述、二では中国国内での警察教育事情、三では受け入れる日本の警察教育事情、四では一九三〇年の警察講習所第一期生の受け入れについて触れる。

中国の近代警察制度は、一九〇〇年の義和団事件の直後、大陸浪人川島浪速と清朝の名門貴族肅親王が設立した警務衙門を改編した、北京の内城巡警総庁、外城巡警総庁から始まる。

設立当初は効率もよかったが、辛亥革命を経て軍閥内戦の時期には、警察官の質・規律は全体的に低下している。その理由は、軍閥内戦による予算不足が関わっている。

日本の警察官教育機関は、警察練習所（現在の都道府県警察学校に相当）と、警察大学の前身の警察講習所がある。

一九二七年ごろから、中国の現職警察官、法学を専攻した日本留學生から警察講習所、警視庁警察練習所への留学希望が寄せられている。当初は双方とも留學生受け入れを断っていた。しかし、警視庁警察練習所は一九二八年から、警察講習所も一九三〇年から受け入れている。

第三章、一九三七年以降の警察留學生

一では一九三七年の日中戦争開戦以降の留學生受け入れの目的、二では中国側の留學生送り出しの事情と選抜方法、三では外務省外交史料館と国立公文書館所蔵の

一九三九年、四〇年の留学生名簿を使用しての、留学生の内訳、四では日本側の事情について触れる。

一九三七年の日中戦争開戦以降も、警察講習所は留学生を受け入れている。

親日派の育成を目的としているが、それだけでは留学生受け入れの説明ができない。というのも、スパイ騒動を起こした者などがいても、なお受け入れているからである。

国民政府時代の留学生は、警察官としての勤務経験はない。本章の留学生は警察官としての勤務経験がある者である。

日本も、長期間軍政を敷いているわけにはいかない。よって日本式の訓練を受けた中国人警察官を、日本との交渉担当者や、警察学校、警士教練所の教官、助教にしようとしたのではなからうか。